

長田夏樹氏と契丹小字研究

吉池孝一

一

故長田夏樹先生のご研究の柱の一つが契丹文字、西夏文字、女真文字などの塞外文字の研究であるということにつきましては、ご案内のとおりでございます。本日は先生の塞外文字研究のうち、アジアの未解読文字として、現在も解読が進行中の契丹文字につきお話しをさせていただきます<sup>1</sup>。なお、契丹文字には、契丹大字と<sup>2</sup>、契丹小字という大小二種類がございます。二種類のうち契丹小字はローマ字や仮名文字のような表音文字を主体としたもので、文字の発音の推定が解読のかなめとなります。この契丹小字の解読と発音の推定につきまして、先生のご研究を紹介させていただくということになります。

二

さて、契丹小字の発音の推定と申しますと、まずは1951年3月の『言語研究』に掲載された村山七郎先生の「契丹文字解読の方法」という論文を挙げなければなりません。これは、契丹小字の字形が突厥文字に拠るとする説で、デンマークの学者トムセンによって解読がなされた突厥文字の発音を契丹小字に当てはめ、それによって契丹語の解読を行うというものです<sup>3</sup>。この突厥文字依拠説は、少なくとも、字形を借りたという意味では、ま

---

<sup>1</sup> これは「長田夏樹先生を偲ぶ会」（神戸市外国語大学。2011年1月8日）でお話しをさせていただいた内容にやや訂正を加え注を付したものです。

長田学の中における塞外文字研究の位置づけについては長田 2001d に氏自ら述べるところがある。すなわち「筆者は半世紀にわたる学究生活において、言語及び文字に視点を据え、こうした東アジア世界諸民族相互の異文化接触と文化変容の問題を多岐にわたって論及してきた。・・・略・・・。中でも、唐文化を摂取しつつ発展した周辺諸民族が大唐帝国の衰退に乗じて勃興した10世紀から、元帝国の出現を見る13世紀にかけて、地方国家を建てるほどに活躍した契丹、西夏及び女真民族が残した未解読の文字に対する関心は、非常なものがあつた。と言うのも、契丹文字や女真文字、さらに西夏文字こそ、漢字をもとにし、相互が関連を持ちあい、かつ固有の言語を表記するため各個が独自性を持つといった点において、筆者の研究テーマの核心を備えていたからである」（738-739頁）。

<sup>2</sup> 契丹大字は音節文字を主体とするとの説もあり、その表音文字と表意文字の関係の認識は難しい。「契丹大字表音節文字説」の主導者は契丹文字研究家として著名な劉鳳翥氏であり、その説の概略については吉池 2007 を参照されたい。

<sup>3</sup> 解読が成功したか否かを問わず、特徴のある説がでた場合、それがどのような状況下で、如何なるものに影響を受けた結果として出てきたのかということは解読史上の問題となり得る。突厥文字依拠説の場合、突厥文字が半世紀程前(1893年)にデンマークの学者トムセン(V. Thomsen)によって解読されたという状況下での出来事であるが、私はより直接的にはチベット文字とパスパ文字の関係がヒントとなったのではないかと想像している。この想像は或いはとっぴな印象を与えるかもしれないが、村山氏が想定した突厥文字と契丹小字の関係は、ちょうど、チベット文字によって作られたパスパ文字に対して、チベット文字の発音を当てはめて、それによって各種のパスパ文字資料を読み解くという方法に類似した面があると考えるのである。村山七郎氏は、アルタイ比較言語学者でありパスパ字蒙古語の研究者でもあつた N.ポツペ氏

を外していたようです<sup>4</sup>。村山先生の突厥文字に拠ったとする説への反論は、同じ年の12月に、『神戸外大論叢』に掲載されました。長田先生の「契丹文字解読の可能性 一村山七郎氏の論文を読みて一」でございます。これによって解読は正しい方向に軌道修正されました。長田先生の論文の注目すべき点は、突厥文字依拠説への反論もさることながら、先生ご自身の解読の方法を提示したところにあるようです。

長田先生はこの論文で、代々の契丹王の墓陵から出土した四種類の墓誌を資料として、そこから327個の文字の成分<sup>5</sup>すなわち契丹のアルファベットを取り出し、表にまとめて提示しました。なお、この契丹小字のアルファベットを、ここでは単に文字と呼ぶことに致します。このような文字表の提示は研究史上初めての試みとなります<sup>6</sup>。この文字をハンダルのように左右・上下に組み合わせて単語が形作られるわけですが、この論文ではそれぞれの文字が、単語のどの位置に何回出てくるかを調査し、その結果を統計表として示しております<sup>7</sup>。このような研究は、未解読の表音文字を解読するうえで出発点となるものであり、解読を確かな軌道に乗せたこの論文は、契丹文字解読の一つの大きな山を越えた成果といえることができます。この統計的方法から出た更なる成果は、1953年に京都大学から出版された有名な『慶陵』という書籍に添付された2枚の契丹文字表となって現れます。この文字表は、変化しない部分を契丹語の語幹とし、変化する部分を動詞の活用語尾などのような「接尾語」として抽出したものです。さらに「接尾語」の発音を中世蒙古語との比較により推定しました<sup>8</sup>。これをもちまして、あとは300ほどの文字の発音を定めるという

---

のもとで研究をされていた由、パスパ文字の音価推定にあたってチベット文字の果たした役割を熟知していたはずである。後に、ポツペ氏の手になるパスパ字蒙古語の著書の抄訳を山崎忠氏と共に「方形字」(1955年。原書は1941年出版)と題して公表してもおられる。

<sup>4</sup> 村山1951には契丹小字と蒙古文語の比較を通して穏当な音価推定に至った部分があり、このような部分は評価されるべきである。なお、字形と音価を突厥文字によったとする説の成立は困難であるが、最近では、子音と母音の表記の仕方において契丹小字は突厥文字の影響を受けたのではないかとの説が呉英喆2007より提出されている。すなわち、ふつうs, pu, irなどと音価が推定されている契丹小字の原字は、契丹語において[sə]と[es]、[bu]と[ab]、[ir]と[ri]のように両用の読み方が為されるという。子音の前後に母音を付加して読む言語事実の指摘は興味深いことであるが、これを突厥文字との関連においてとらえ得るかという点についてはなお検討を要するようにおもう。このような意味で突厥文字の影響を受けたとする説は、早くは王弘力1986にみえる。子音の前後に母音を付加して読むという言語事実の指摘は、早くは清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼1985の110-111頁にみえる。

<sup>5</sup> 長田氏は「元字」と称する。この用語は早くは白鳥1898にみえる。契丹文字研究小組1977をはじめとして中国の研究者は「原字」と称する。

<sup>6</sup> この表を「契丹元字総表」と称する。同論文を2001年の長田夏樹論述集に再録の折には残念ながら本表は削除された。長田2001a参照。

<sup>7</sup> その際、篆書と楷書と行書と草書に相当する文字の同定を行っている。このような書体を異にする文字の同定の試みは早くは羅福成1934の「同文異書舉例」にみえる。もっとも後者は18字余りの初歩的な試みである。

<sup>8</sup> 田村實造・小林行雄著『慶陵』上巻(本文冊)末尾に「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)」および「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(2)」という二枚の表が、本体の書籍とは別刷りとなって

二つ目の山を越す仕事が残ったわけですが、50年代ということを考えるならば、これらの研究は突出したものであるということが出来ます。

### 三

しかしながら、解読の二つ目の山である文字の発音の推定を大きくすすめたのは、中国の清格爾泰先生を中心とする契丹文字研究グループでした。このグループの論文は26年後の1977年にでました。主な方法は、契丹小字の文章のなかに表れる中国語からの借用語の発音を利用することにより契丹小字の発音を推定するというものです<sup>9</sup>。

もっとも、中国語から借用した単語が発音の推定に利用できるということは、早くは1943年に日本の山路廣明氏によって示されており、1963年にはロシアの研究者シャフクノフ氏により実践されておりましたが<sup>10</sup>、借用中国語音を利用するという解読方法が効力を発揮して大きな成果に繋がるということはありませんでした。村山先生、長田先生をはじめ日本の研究は、契丹語の解読に目が向いていたように見受けられます。それに対して、中国の研究グループは、いったん契丹語の解読を脇に置き、借用中国語を利用した発音の推定に専念し、それが大きな成果に繋がったものと想像します<sup>11</sup>。それと申しますのも、中国語から借用した単語を書き表す場合は比較的精密です。母音はほぼ例外なく表記されますし<sup>12</sup>、時には母音を糊しろのように重複させて表記します<sup>13</sup>。子音の表記の仕方も時代が降るにつれて次第に精密になっていきます<sup>14</sup>。ところが、契丹語を書き表す場合、明瞭な形で母音が

---

挟み込まれている。この表には「小林行雄・山崎忠・長田夏樹作製」とあるから小林・山崎・長田1953と呼ぶべきであろう。小林・山崎・長田1953は現在においても有用な部分を含むもので、この表の成立の経緯及び表自体が示す内容については別途検討されなければならない。なお、この表が『慶陵』に添付された経緯の一端については長田夏樹先生追悼集刊行会2011の264-265頁に「契丹文字の結んだ縁」（『小林行雄先生追悼録』1994年からの再録）として長田氏自ら言及するところがある。

<sup>9</sup> 契丹文字研究小組1977。この研究は8年後の1985年に『契丹小字研究』として結実し中国社会科学出版社から大部の著として発行された。

<sup>10</sup> シャフクノフ1963は未見。契丹文字研究小組1977および長田1984にみえる内容紹介による。

<sup>11</sup> 研究に傾ける研究者数と時間の総量が異なるわけであるから、このようなことは軽々に言及し得ないのであるが、研究の方向がもたらす結果に着目して、あえて言うならばこういうことなのであろう。日本の研究は山路1943の示唆を生かすことができなかつたが、中国の研究はシャフクノフ1963を発展させ大きな成果に繋げたということであろう。

<sup>12</sup> 契丹文字研究小組1977をはじめとする諸説の推定音価によるかぎりにおいて、母音が表記されていないように見えるものに「金」の漢字音がある。「金」は契丹小字でk-mとなる。

<sup>13</sup> 「山」は三つの原字でſ + a + an → ſanと表記し、「洛」も三つの原字でl(ə) + au + u → lauと表記する。用例は契丹文字研究小組1977の91頁による。なお、l(ə)の(ə)については注16を参照していただきたい。

<sup>14</sup> 吉池2003参照。いま仮に契丹小字を{}を付したラテン文字で示し、借用中国語音の[s-][ts-][ts'-]を契丹小字{a}{b}{c}で表記する場合、第I期：{a}[s-]、{a}[ts-]、{a}[ts'-] → 第II期：{a}[s-]、{b}[ts-]、{b}[ts'-] → 第III期：{a}[s-]、{b}[ts-]、{c}[ts'-]のように表記の仕方が次第に精密になっていく。これは契丹の固有語に破擦音の[ts-]と[ts'-]が無かつたため当初は[s-]を表す{a}で[s-][ts-][ts'-]の三種を表記していたのであるが、次いで[ts-]を表す{b}を作り出しこの{b}で[ts-]と

表記されることはなく、子音文字の連続のようにみえます。このように、発音を推定する契機としましては、中国語から借用した単語は、契丹語の単語よりも数段優れておりました。もっとも、このようなことは後になって分かったことでございます。

#### 四

さて、中国の契丹文字研究グループの 1977 年の研究がでますと、その 7 年後の 1984 年に、長田先生は『内陸アジア言語の研究 I』に「契丹語解読方法論序説」を発表されました。このご研究の八割がたは研究史となっております。ここでご紹介したく思いますのは、最後の二割の部分でございます。契丹小字の碑文に「許王墓誌」と名づけられた墓誌銘がございます<sup>15</sup>。長田先生は、この「許王墓誌」の契丹小字の発音を推定し、論文の最後に添付されました。これは先生がお考えになった推定音で、子音を表す文字の扱いに特徴があります。やや細部に渡る話となり恐縮ですが、先にご紹介した中国の契丹文字研究グループは、中国語からの借用語によって、契丹小字の発音を推定した結果、子音のみを表す文字の存在を幾つか想定することになりました。もっとも、その子音を表す文字を用いて契丹語を書き表す場合、母音が想定される箇所では一律に中舌の曖昧母音[a]を帯びるとしました<sup>16</sup>。一律に曖昧母音を付すということは、子音を表す文字と特定の母音との結合を認め

---

[ts'-]を表記するようになった。最後に[ts'-]を表す{c}を作り出しこの{c}で [ts'-]を表記するようになったため、{a}[s-]、{b}[ts-]、{c}[ts'-]という正書法ができあがったという次第である。このような正書法の出現が、契丹語の音韻体系の中に/ts-//ts'-/という音韻が確立するか、あるいは確立しつつあることを示すものか、あるいはパスパ字蒙古語の中の中国語語彙の表記法にみられるような外来語を表記するための文字上の書き分けにすぎないのか、あるいは漢人の何らかの関わりを示すものであるのか検討を要する事項の一つである。

<sup>15</sup> 長田 1984 はこの墓主を、僅かな中国語の情報により耶律斡特刺と特定し中国の歴史書である『遼史』に拠りその経歴を詳しく紹介した。この墓主に関する説はその後、王弘力 1986 で紹介され定説となり現在にいたっている。

<sup>16</sup> 「観察了若干類型的例子，考慮到央元音在元音体系中特有的適應性，我們推斷，表示輔音的契丹原字因出現在音節結構中的不同位置，除了基本的音值而外，還可以在這個輔音的后面附帶一個元音 e【[ə]に相当】，而這個元音 e 在語流中同別的音發生語音結合時，便融入另一個起主導作用的元音之中。」（契丹文字研究小組 1977 の 64 頁）。なお下線部は清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985 で「前面或后面」と書き換えられており、これは注 4 で述べたように王弘力 1986 の突厥文字の影響を受けたとする説につながるものである。契丹文字研究小組 1977 では 130 の原字に推定音価が付されており、そのうち 29 原字が子音字と推定されている。この 29 字は、清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985 でも同様に子音字とされているものであり音価も変わるところはない。この子音原字であるが、借用中国語と原字との対応によるかぎり、子音と想定することについては穏当なところである。たとえば、いま契丹小字を{}を付したラテン文字で示すとすると、「密」の漢字音[mi?]/[mi]には原字{a+b}が、「馬」の漢字音[ma]には原字{a+c}が、「金」の漢字音[kim]には原字{d+a}が対応することになるわけであるが、このような場合、原字{a}に m を想定することに無理はない。しかしながら、それを契丹語にあてはめた場合、子音が連続し、母音が想定されるにもかかわらず母音が表記されない語が多数にのぼってしまう。この点を解決するために契丹文字研究小組 1977 はこのような子音原字に母音[a]を想定する。たとえば、契丹語の『馬』に対応する原字に{a+e}がある。これを蒙古文語 mori や女真語や満洲語と比較して原字{a}を[m+母音]とする。さきに

ないということとほぼ同様の意味となります<sup>17</sup>。それに対して1984年の長田先生の論文は、子音を表す文字とされているものと特定の母音とを結び付けました。その後、この論文に改定を加えて2001年の『長田夏樹論述集』に収めるにあたって、結びつく母音の種類を改定前よりも増やしており、このことから、長田先生の直近のお考えを知ることができます<sup>18</sup>。

---

原字{a}を借用中国語との対応により子音mとしたわけであるが、契丹語をみると[m+母音]と考えざるを得ない。そこでこの母音を[a]と想定するのである。なお、これらの子音原字は借用中国語においては実質的には発音されないものとする。たとえば{f+g+h}で表記される「洛」の漢字音はl(a)-au-uであるが、通常は(a)を省略してlauと表記することになる。

<sup>17</sup> この考えは清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1978, 1985にも受け継がれ、その後、高路加 1988に至ると、契丹文字研究小組 1977を補充する考えが提出された。すなわち、子音原字が二つ以上列なり、併せて語頭にある場合【これは「母音の存在が想定される場合」というのと同義である：吉池】、それぞれ母音[a]を帯びる。しかしながら、母音を持つ原字と連用される場合、子音原字はその母音と同類の母音を帯びる（「表示輔音的契丹原字，在兩個或數個連用并位于詞首時，一般各帶有一個央元音a；在同一字中有另一表示元音的原字時，這些表示輔音的原字也可帶有同類元音。」49頁）というものである。これは明示されている母音がある場合、その母音との母音調和を考慮して、[a]を他の母音と入れ替えるというものである。清格爾泰 1997はこの考えに拠って幾つかの契丹語の読音を定めた。例えば契丹語の『第一』はm-sa-aiというように子音原字を含む3つの原字で表記されているわけであるが、これをmasaiと読むのである。同様に、『第二』ʃ-ru-wei → ʃuruwei、『第五』t'-w-o-i → t'owoiなどとする。これもやはり特定の母音との結合を想定しない方向の説といえよう。

なお、豊田 1997は契丹小字の綴り字を四種に分け、その内の一つに子音のみで綴られる「表子音連綴字」（「字」とあるが契丹語の単語に相当）を立てていることからみて純粋な子音原字の存在を認めているようである。また2008年に『KOTONOHA』に掲載された中村雅之氏の「表音文字の配列」という論文では「ウイグル文字は原則として単音文字であるが、母音に関しては表記原則が一定していない。ある場合には表記され、ある場合にはされない。しかし漢字音表記に関しては原則として母音を必ず表記している。固有のウイグル語では母音が十分に表記されず、漢字音では念入りに表記するという方法は、契丹小字においても受け継がれている。つまり、固有の契丹語表記では母音は必ずしも全て表記されないが、漢字音に関しては原則として表記している。このような表記法も、ウイグル文字に倣ったと言いうるであろう。」（3頁）とする。すなわち、契丹小字で固有の契丹語を表記する場合は、ウイグル文字でウイグル語を表記する用法と同様に、母音が十分に表記されなかったとする。これらは純粋な子音原字の存在を想定する説である。

<sup>18</sup> 契丹文字研究小組 1977および清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985では29原字が子音字と推定されており、そのうち20字が長田 1984と対応する。長田 1984で見られる母音を、何種類の子音と結びつくかという数字とともに挙げると、e(10), a(4), i(4), u(1), ong(1)の計20となる。つぎに長田 2001bの状況を示すと、e(3), a(3), i(i), u(5), ang(1), y(7)の計20となる。なお両論文では異種の母音が後続する場合および音節末となって母音が発音されない場合は、当該の母音の上下に記号 ㄱ が付される。長田 2001cによると、yは[u, u]で、uは[u, u]であるという。uの音価につき原文には唇歯接近音[v]として記されているが、母音の[v]を意図したものであろう。これらの母音を推定した根拠については、長田 1984と2001bのいずれにおいても述べられていないが、幾つかについては両論文の語例を比較検討することにより推定の経緯を知ることができるものと考えている。

なお、長田 1984の母音の扱いについて論評したものに早くは中村 1999がある。中村 1999は、原字番号

このように、子音文字の扱いについて、特定の母音との結合を認めるか或いは認めないかという大きくは二つの方向があり、長田先生の説は特定の母音との結合を認めるものとなっております。どちらの方向に軍配が上がるのか、あるいは両者を折衷したものとなるのか、今後、契丹語部分の解読の進展とともに明らかになっていくものと、期待をしつつ、見守っておるところでございます<sup>19</sup>。

---

244(清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985 による)につき、長田 1984 は se とするが王弘力 1986 のように子音字[s]と想定し、母音については読み手が補うものとしたほうがよいとする。すなわち、許王墓誌に人名「乙辛隱」に対応する原字として s-n-n があり[əsan-wun]と読めるという王弘力 1986 の説を紹介し、次いでこの s は中国語語彙の声母にも常用されることを指摘し、このような[əs]と[s-]の両用の読みを可能とするためには原字番号 244 を子音字 s としてその母音については読み手が補うとした方がよいとするのである。また、「下」の漢字音を表記する原字番号 13 につき、長田 1984 は xia と推定音価を付すが、「下」の字音は遼代に口蓋化(拗音化)していたかどうかが問題となるものであり、この原字は「行」[xap]の第一字目にも用いられていることからみて、xa とすべきであるとする。

<sup>19</sup> 契丹語の表記にあっては、契丹文字研究小組 1977 は子音文字につき、母音の存在が想定される場合一律に母音 ə を付す。高路加 1988 や清格爾泰 1997 はそれを展開したものである。いずれも、特定の母音ではないが、母音との結合を想定する。そうであるならば、長田氏の説と、契丹文字研究小組 1977 から清格爾泰 1997 に至る諸説は母音を付すという点においては同様ということになる。あるいは、契丹文字研究小組 1977 から清格爾泰 1997 に至る諸説の ə などは、後続する母音の性質が明らかになるまでの便宜的な措置と見なしてさしつかえないものかもしれない。その点、豊田 1997(注 17 参照)や中村 2008(注 17 参照)などは、母音は表記されていないとするわけであるから、母音との結合を想定するか或いは想定しないかという点においてみるならば、契丹文字研究小組 1977 から清格爾泰 1997 に至る諸説と長田氏はともに母音との結合を想定するという点で共通した説であり、それに対して豊田 1997 や中村 2008 などは母音との結合を想定しない説ということになる。

なお、契丹語音の推定は文字資料や同系言語との比較をとおして行われるわけであるが、ほんらい、契丹語音と契丹小字音、すなわち音韻と文字(文字自体の表音能力)は別のものである。例えばウイグル式蒙古文字で t と d が区別されないなど文字の表音能力には限界がある。また、ウイグル式蒙古字蒙古語で YRLX(jrlγ おおせ)であり、対応するパスパ字蒙古語で j(a)r-liq(おおせ)であったとしても、前者は母音が省略されているだけであり、パスパ字蒙古語などの語形によりウイグル式蒙古字の Y と L が母音を伴っていたなどとするわけにはいかない。想定される音韻とそれを表記する文字とは別物なのである。そうはいつでも、未解読文字の解読の過程にあっては、音韻と文字(文字自体の表音能力)を截然と分けるのは困難であり、またそれほど価値的であるとも思えない。しかしながら解読も一定の段階に到ったならば、両者の相違について考慮しなければならないであろうし、それはまた解読を一步前に進めることにもなる。上記ウイグル式蒙古字蒙古語とパスパ字蒙古語の用例は中村・松川 1993 によった。

〈参考文献(発行年順)〉

- 白鳥庫吉 1898. 「契丹女真西夏文字考」, 『史学雑誌』第九編第十一・十二号。『白鳥庫吉全集 第五卷 塞外民族史研究 下』(岩波書店、1970年)所収, 45-68頁。
- 羅福成 1934. 「同文異書舉例」, 『遼陵石刻集録』羅振玉輯, 卷四。
- エヌ・エヌ・ホッパ<sup>°</sup> 著/村山七郎・山崎忠共訳 1955. 「方形字」, 『日本文化』(天理大学)35号, 236-187(1-50)頁。
- 山路廣明 1943. 「契丹大字考」, 『浮田和民博士記念 史學論文集』(早稲田大学史学会編纂)東京:六甲書房、313-322頁。
- 村山七郎 1951. 「契丹字解読の方法」, 『言語研究』第17・18号, 47-70頁。
- 長田夏樹 1951. 「契丹文字解読の可能性 —村山七郎氏の論文を読みて—」, 『神戸外大論叢』第2巻第4号, 40-66頁。
- 田村實造・小林行雄 1952-53. 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』(上巻本文冊、下巻圖版冊)田村實造・小林行雄著, 京都大學文學部 座右寶刊行会。上巻は1953年、下巻は1952年発行。
- 小林行雄・山崎忠・長田夏樹 1953. 「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」, 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』(上巻本文冊、下巻圖版冊)田村實造・小林行雄著, 京都大學文學部 座右寶刊行会。下巻は1952年、上巻は1953年発行。
- 中国社会科学院民族研究所・内蒙古大学蒙古語文研究室契丹文字研究小組 1977. 「關於契丹小字研究」, 『内蒙古大学学报』1977年第4期契丹小字研究專号, 全97頁。
- 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1978. 「契丹小字解読新探」, 『考古学报』1978年第3期, 355-387頁。
- 長田夏樹 1984. 「契丹語解読方法論序説」, 『内陸アジア言語の研究 I』神戸市外国語大学, 1-49頁。
- 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社。
- 王弘力 1986. 「契丹小字墓誌研究」, 『民族語文』1986年第4期, 56-70頁。
- 高路加 1988. 「契丹小字複数符号探索」, 『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』1988年第2期, 44-51頁。
- 中村 淳・松川 節 1993. 「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」, 『内陸アジア言語の研究 VIII』(中央ユーラシア学研究会), 1-92頁, 写真資料8枚。
- 豊田五郎 1997. 「契丹文字」, 『月刊 しにか』(大修館書店)1997, Vol. 8/No. 6, 28-34頁。
- 清格爾泰 1997. 「契丹語数詞及契丹小字拼讀法」, 『阿爾泰学报』(韓国)第7号。『契丹小字研究論文選編』(陳乃雄・包聯群編、内蒙古人民出版社)への再録(710-724頁)による。
- 中村雅之 1999. 「長田夏樹氏の契丹小字翻字法(特に母音表記)について」, 第14回対訳対音資料研究会(東京都立大学にて。1999年9月18日)発表レジュメ。
- 長田夏樹 2001a. 「第8章 契丹文字解読の可能性 —村山七郎氏の論文を読みて—」, 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』京都市:ナカニシヤ出版, 128-153頁。
- 長田夏樹 2001b. 「第29章 契丹語解読方法論序説」, 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』京都市:ナカニシヤ出版, 634-687頁。
- 長田夏樹 2001c. 「第33章 契丹漢字音探源—契丹小字によって表記された漢字音の音価とその体系について—」, 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗

- 言語学試論・邪馬台国の言語一』京都市：ナカニシヤ出版, 724-737 頁。
- 長田夏樹 2001d. 「第 34 章 契丹文字, 女真文字及び西夏文字の関連性についての一考察 —成吉思皇帝聖旨牌裏面の番字を足掛かりとして—」, 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』京都市：ナカニシヤ出版, 738-745 頁。
- 吉池孝一 2003. 「漢語の精母系子音を表わす契丹小字について」, 『KOTONOHA』第 13 号, 18-21 頁。
- 吉池孝一 2007. 「劉氏の契丹大字表音節文字説について」, 『KOTONOHA』第 58 号, 16-23 頁。
- 呉英喆 2007. 「契丹小字中の“元音附加法”」, 『民族語文』2007 年第 4 期, 40-51 頁。
- 中村雅之 2008. 「表音文字の配列」, 『KOTONOHA』第 72 号, 1-4 頁。
- 長田夏樹先生追悼集刊行会(長田礼子 長田俊樹 遠藤光暁 竹越孝 太田斎 橋本貴子)編 2011. 『長田夏樹先生追悼集』好文出版、全 486 頁。